

氏名	なが た とも ゆき 永 田 知 之
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 424 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	唐 代 の 文 学 理 論

論文調査委員 (主査) 教授 川合康三 教授 平田昌司 准教授 宇佐美文理

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、唐代の文学理論、その背景にある思潮の考察を目的とする。「文学理論」が意味する範囲は広いが、ここでは「古」と「新」、この一見相反した観念のいずれに創作の軸足を置くべきか、唐人がその問題をどう捉えたかという点に主題を絞る。

主要部は陳子昂らを扱う前編四章、皎然を取り上げる後編三章の全七章から成る。他に序章と結語を加えて、全体は構成される。

序章では、本論文が主題の分析に際して選んだ手法を説明する。初唐の陳子昂は唐代における復古的な文学思潮の開祖と長く認識されてきた。だが、従来の研究は、多くそれは彼自身の作品・理論が唐人に広く受容されたためだと曖昧に結論付けている。

実のところ、彼が敬仰されるに至った過程には、より複雑な事情が存する。文学上の復古主義を考える上で、その解明は不可欠だ。

盛・中唐の交に生きた詩僧である皎然は、詩論書『詩式』を著している。同書は用語・観念の面及び佛僧が詩歌評論へ本格的に参入した時点で、同類の批評書、所謂「詩格」に絶大な影響を与えた。

皎然の詩論中、批評・作詩法に関する部分以外で注目されるのは、その反「復古」的な立場だ。必ずしも「古」に囚われず、むしろ「新」へと傾いた作詩を唱えるそれは、「創新」的と称せるだろう。

両極ともいえる陳子昂（及びその賞揚者）と皎然の主張を併せ見れば、唐代の文学における「復古」と「創新」の在り方を明らかにできるのではないか。この発想が、本論文の出発点となる。

第一章では、盧藏用によって、陳子昂の人物像が形成される過程を追う。陳子昂を賞揚しながら、唐人は概ね彼の個別の作品・理論に触れるところが無い。それとは対照的に、盧藏用の「陳伯玉文集序」、「陳氏別伝」は、唐代の文章数編で利用される。諸種の資料から分かる陳子昂集の速やかで広い流布は、同時にそこに附されたこの二編が唐代にある程度普及した様をも示唆する。

「陳伯玉文集序」は文学史を魏晋までの隆盛期、六朝から初唐に及ぶ衰退期、その後の復興期に三分した。文学復興の功績を陳子昂一人に帰す明快さと唐代を盛世と断じる態度は、唐人の好尚に適い、広く受容されたと思われる。

陳子昂の伝記である「陳氏別伝」には、官界での挫折、非業の最期が描かれる。その人生を不遇の連続とする視座が後世の文学者による彼への好意的評価に繋がったことは、想像に難くない。

「与毛僕書」といった零細な資料をも用いれば、盧藏用の思想基盤は、ごく折衷的だったと分かる。盛唐以降の陳子昂観は「陳伯玉文集序」等に見える儒教的な側面を強調したものだ。結果として、その形成に盧藏用が果たした役割は、極めて大きい。

前章を承けて、第二章では盧藏用から後、中唐までの陳子昂評価を分析する。韓柳元白の評価は概ね彼に対して好意的だ

った。やや先立つ時代における陳子昂の事跡についての言及、あるいは李杜の批評もこの点は軌を一にする。

続いて、盛・中唐の交に生きた古文家の文学論を瞥見する。彼らこそ「盧序」の史観を受容して、陳子昂を唐代文学最初の改革者に、自らをその後継者として位置付けたことが、そこで明らかになる。

中唐の古文家による陳子昂賞揚は、実はこれを受け継ぐものだった。「感遇」詩はもとより陳子昂の詩は盛唐から諷刺に富むと考えられていた。中唐における陳子昂受容は、これら先人が彼に社会性や「復古」の気味を看取したことと大きく関わる。

初唐の著名作家は概ね人格に欠陥を有した。その意味で、陳子昂の批判される点の無い人間性も、盧藏用による素早い喧伝、作品の政治性と相俟って、彼の文学的な評価を高めたであろう。

これ以降も、陳子昂は文学者に論議される対象であり続けた。第三章は、その様子を概観する。唐末でも、彼は人格・文学双方で、賞賛されていた。非古文家に好評を博したり、それまで以上に詩歌を賞められた点から、評価の広まりが窺える。

陳子昂への高評価は、宋初も衰えなかった。この安定した評価に一石を投じたのが、北宋中頃の『新唐書』による酷評だ。同書は彼の女帝・武則天に対する忠勤を攻撃した。これは唐室の祖先たる彼女に遠慮する必要がなくなった宋代なればこそその批判であった。

この頃より後、嘗てのような陳子昂を激賞する言説は、あまり見られなくなる。古文家始め唐人には必要な「唐代文学最初の革新者」として陳子昂のもつ存在意義が、宋人には不要であったことが理由だ。韓愈らの先駆者として一定の意義を見出すにせよ、宋代に彼の地位が漸次、低くなるのは当然の帰結だった。陳子昂評価の低落は、所謂「古文復興運動」への捉え方が唐宋間でいかに異なるかを示す。

前章までとは方向を変えて、第四章は通史著述の側面より唐代の文学史観を考える。王通の『統書』、『元経』撰述や彼の孫の王勃によるその事跡の宣揚（乃至創出）を信頼できる資料のみから分析すれば、両者が歴史を大づかみに捉える感覚をもっていたと分かる。

陳子昂は通史『後史記』の述作を志していた。これと同様に彼の歴史への関心を表すのが「大運」なる言葉の頻用だ。そこには天道と人間の関わり、歴史の大きな流れに対する眼差しが感じられる。

蕭穎士も、歴代の制度を記す『歴代通典』を書こうとしていた。彼の史書編纂には家系や人脈からする要素も色濃く見られる。

王勃、陳子昂、蕭穎士が揃って通史に関わったことは、偶然ではない。王朝の枠組みに囚われぬ通史の視座は、彼らの文学論の根幹たる六朝に対する一括した否定と大きく関係している。このことは、唐代に先立つ統一安定期である漢代の尊重と表裏を成す。即ち唐を政治的・文学的に漢の後継者と認める思想が、そこには見える。

第五章は、『詩式』の構造を考察する。『詩式』は古今の詩句を五つの格に分けて置く挙例と詩論から成る。評価の基準は情、意の表現、事（典故使用）の巧拙、格（風格）の高下だった。

同じ詩を分断して別の格へ置いたり、一首の詩全体を減多に引かないといった特徴が、そこに見られる。このことは、詩人や作品に囚われず詩句をこそ主体とした皎然の批評態度を示唆する。

『詩式』が選ぶ詩句の出典を調べると、詩論では批判する唐代の秀句集と選録の傾向が類似し（断片的な資料から推測）、『文選』所収作品も多く採る事実が分かる。これは、皎然も当時一般の詩評と無縁ではなく、また選詩よりも選句を重視していたことを明らかにする。

品第を用いた批評書は六朝以来、芸術の諸分野で著され続けた。皎然はそこから多くの影響を受けつつ、『詩式』中で新機軸をも打ち出した。品級名を単に数字や上下、「逸」のような抽象的な観念ではなく具体的な文章で表す、また時に個別の詩句を選録する理由を詩論で提示した点がそれだ。

実をいえば、唐から宋にかけて、摘句と品第は芸術批評の方法として力を失いつつあった。『詩式』が用いる両者を融合して、更に新しい要素を加える姿勢はその裏返しでもあったと理解される。

第六章は、前章の分析を踏まえ、皎然の文学史観を論じる。詩人・詩篇ではなく詩句を品第の対象としたため、『詩式』は評価が不確定な同時代の詩を批評したり、著名人も個々の作品で差を付けるなど、詩評の細密化を図り得た。これは前代の詩人に劣るとされがちな後代のそれが部分的でも古人に及ぶ可能性を見出す皎然の詩学認識と密接に関わる。

この種の詩論が、下降的文学史観と相容れぬことは、容易に想像される。その意味で、皎然が陳子昂、というよりむしろ彼を題材に復古的な文学論を展開した盧藏用を非難するのは、当然であった。

ただし、『詩式』の選句・品第は唐詩に厳しい側面をもつ。その背景には、同時代人が互いに模倣し合うマンネリズムの横行がある。無原則な復古主義と同様、それは皎然の忌むところだった。

この状況下、皎然は現代の詩が彼にとって理想の在り方へ向かう方途を『詩式』や同じく彼が著した『詩議』で模索していた。尚古主義が根強い時代に、その反「復古」的な詩論は異彩を放つ。

第七章では『詩議』、『詩式』がしばしば他者の詩論を否定したことに着目して、皎然と他の唐代の文学論を比較する。現存の資料より、『詩式』の選詩・選句と品第は、詩壇の世評から影響を受けていたと確認される。

だが、その反面で皎然の批評が当時、流行していた文学論と一線を画す例も見落とせない。彼の時代にはほとんど評価されていなかった杜甫を文学批評の俎上に載せたのは、その一例だ。また、単なる目新しさを良しとせず、時に模擬詩を本歌以上に評価しながら、文学の発展的变化を認める「通變」説を唱えた点も注目される。同時代に生きた古文家の文論と比較しても、これは興味深い。

皎然が反対したのは、初・盛唐の詩格に見える主張だった。これらへの反論より彼の批評がもつ傾向を読み取れば、それは芸術性の尊重、非教条的な柔軟性及び斯界の主流めいた言説にもひるまない大胆さだったと結論付けられる。

結語では、序章での問題提起に立ち戻る。各章で明らかになった事柄によれば、陳子昂らと皎然はいずれも時の詩文に不満を抱き、結果的にそれぞれ「復古」と「創新」を唱えた。六朝への捉え方を大きく殊にする両者の文学史観は、その表れだ。

「古」と「新」を基調にした文学論がかくも明確に軌跡を交えた例は、嘗て無かった。「古文復興運動」との関連も含め、盛・中唐の交に起きた両者の相剋が文学史的に意義深いと総括される所以である。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は初唐の陳子昂（六六一～七〇二）、中唐の皎然（?～?）、この二人の文学論を取り上げ、それを核として唐代の文学理論の全体の流れを捉えようとしたものである。陳子昂、皎然、いずれも唐代の文学論として重要な言説をのこしているものの、その二人を並べて論じるのは一見奇異な取り合わせであるかに見える。陳子昂といえば、何よりもまず盛唐、中唐に盛んに唱えられるようになる「古文」を先駆けて提唱した人として受け止められている。一方、皎然はといえば、詩の批評、詩の技法を具体的、詳細に述べ、それは宋代以後の「詩話」による文学批評の先駆けとみなされている。言葉を換えていえば、陳子昂は文学はいかにあるべきかを語り、皎然は詩はいかにしてすぐれた詩たりうるかを述べているのであって、二人の文学に向かう方向はまったく異なっているかに思われるのである。それに対して論者は「復古」と「創新」という対立する二項を用意し、その対比の枠のなかに両者を置くことによって、陳子昂・皎然の文学論を新たな観点から見直そうと企てる。復古と創新はどちらに重みを置くかに程度の差こそあれ、いつの時代の文学も関わらざるを得ない問題であって、その意味では陳子昂と皎然という個別的な対象を扱いつつも、そこで得られた知見は唐代文学、さらには中国古典文学の全体にも関わる広がりを持っていくということもできる。

こうした視座から論者は陳子昂、皎然の著述はもとより、その周辺に関連する文献、さらには唐代の文学論に関する内外の先行研究を文字通り博捜し、余すところなく目を配っている。論者の資料収集能力には並々ならぬものがあって、研究者に求められる大切な資質を遺憾なく発揮している。

前半は陳子昂を対象とする。ここでまず目を引くのは、陳子昂の論は彼の友人の盧藏用の喧伝によって広まり、受け入れられたという事実を明かにしたことである。陳子昂自身が文学について直接語っているのは、つまるところ「修竹篇序」一篇しかない。それがのちに古文家の祖として祭り上げられるほど大きな影響をもつに至ったのは、陳子昂の死後ほどなく盧藏用が編んだ陳子昂の文集、ことにそこに収められていたであろう盧藏用の手になる「陳子昂集序」、「陳氏別伝」を通してであったことを、陳子昂、盧藏用について語る文献を精査することによって論証する。盧藏用の「序」「別伝」はもちろん盧藏用自身の文学観が色濃く投影されているものだが、以後の人々は陳子昂の所論と区別することなく受け入れ、それをもとにいわゆる古文運動を展開していったと論じている。これは一人の書き手がどのような経緯によって後の世に受容されて

いくかを知る事例としても興味深いものがある。盧蔵用という理解者、喧伝者をもたなかったならば、陳子昂は歴史の波のなかで消えていったかも知れないのである。陳子昂受容の過程を明らかにしたこの部分は、文献を駆使してそこに筋道をつけるといふ論者の長所が見事に結実したものといえよう。

陳子昂の文学観の背後には王朝に関する歴史観が存在していることを論者は続けて明らかにする。陳子昂をはじめとして六朝文学に否定的な態度を取る王勃、蕭穎士、彼らはいずれも通史への関心を抱き、そこには六朝諸王朝への否定とそれに先立つ漢王朝への評価、そしてまた唐代を漢を継承する王朝として位置づける歴史観が共有されているという。これは文学論を文学の外の領域にまで押し広げて捉えようとする、大きな広がりをもった重要な指摘であろう。

後半は皎然の『詩式』を中心とする。『詩式』は五卷本と一卷本という二種に分かれ、テキストに不安な点があるが、論者は今の五卷本そのままではないにせよ、それに近いものは存在したであろうという前提のもとに論を進める。

『詩式』に見える文学批評の方法として、論者は摘句と品第を挙げる。すなわち一首の詩全体を取り上げるのではなく、佳句を摘出し、且つそれをランク付けするというものである。この方法は時代の趨勢と重なり合う部分、皎然独自の新機軸、両者が相俟って構成されていることが仔細に分析されている。

詩句を対象としてそのよしあしを論ずる皎然には、当然ながら古文家のような下降史観、そして下降史観に基づいた復古の主張は見られない。その点では前半で論じる陳子昂の文学観とはまったく相容れないことになる。しかし論者は陳子昂にしても皎然にしても、同時代の文学状況に対する不満という点では共通するところがあり、そこから復古に向かうか創新に向かうかの違いが生じたと結論する。それゆえ対立するかに見えた陳子昂と皎然、復古と創新は実は見かけほどの懸隔がないことになる。論者が両者を同時に論じようとした所以である。確かに新しいものへの希求はしばしば古いものへの志向というかたちであられるものであるから、論者の結論は肯えるところがある。復古・創新という対比のなかに共通性を見ようとしたのが論者の意図である。

今後の研究に望むところを記すならば、文学の理念に向かう陳子昂と実作の批評を扱う皎然、両者の相違をもとに宋代以降の文学論に繋げていく方向であろう。すなわち陳子昂が漢魏へ回帰することを提起した論から古文を復興しようとする主張が巻き起こり、そこから柳宗元の「文は以て道を明かにす」という文学観が提起され、それがさらに宋代のいわゆる載道主義——文学は「道」を載せるための手段であるべきだとする論へと展開していく。そして一方、皎然の詩評からは文学を内容、主張から切り離して詩のできばえのよしあしへ関心を集中する「詩話」が誕生する、というように二極分化していく端緒を、陳子昂、皎然の対比から引き出せるのではないか。

陳子昂は初唐の末期、皎然の中唐の初期の人である。盛唐を挟んでその頭と尾に当たる時期に位置する二人を取り上げたこの論は、唐代の文学論全体の流れにも関わるもので、スケールの大きな論となっていることは十分評価に値する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。